

疫病を生き抜いたヒト族

森 武生

(がん感染症センター都立駒込病院名誉院長)

人間の生存の歴史は感染症との闘いである。遠くネアンデルタール人は細菌かウイルスかの感染症によって滅亡したとする説があるが、ヒト族(現代人)は辛くも生き残り、現在に至る。有史以来記録に残るだけでも、天然痘、結核、レプラ、ペスト、コレラ、インフルエンザ、AIDS、エボラ出血熱、新型コロナウイルスなど枚挙に暇がない。しかも流行には必ず世界規模の戦争が併存する。戦争に伴う人の移動が、感染症を広げるからだ。疾病と戦争により、驚くべき死者数を出しながら、それでもヒト族は、その都度何とか方策を見出して生きながらえてきた。

もつともすさまじい猛威を振るったのは、たぶん痘瘡であり、全世界で猛威を振るい、アメリカ新大陸では人口の八割近くが死亡した。この病はヨーロッパ起源で、アメリカ先住民には、抗体が全くなかったのが原因である。インカ帝国は痘瘡に滅ぼされたという説すらあるが、スペインの狂信的な征服戦争が裏にある。しかし新大陸側も、代わりに梅毒をヨーロッパにプレセントした。この疾患は驚くべきスピードで地球を半回りして、数年の間に日本に到着している。

次いでペストがある。アジアの片隅の伝染病

が、ある日突然目覚めて、西へ西へと進み、ヨーロッパ全部を流行下に置いた。全人口の四分の一が死んだのであるが、この体験の中ではつきりした隔離や検疫の考えが生まれた。都市を封鎖し、罹った人が死に絶え、罹って免疫を得て生き残った人たちだけになったら流行は止まる。感染者の出た船を一定期間、海の上に放ってお

森 武生（もり・たけお）



一九四四年、東京生まれ。一九七一年に東京大学医学部を卒業後、臨床医学の現場に。七五年以来、都立駒込病院の外科に勤務し、外科

部長、院長を務めた。現在は吉祥寺南病院で診察を続けるとともに、途上国の医療体制整備、日赤献血事業に力を入れている。著書に『メソとパレット』I～V（婦人之友社他）。

けば、死ぬ人は死に、生き残った人は自然のワクチンを得る。前者はロンドンなどの大都会で行われたし、後者はヴェネチアが嚆矢の様である。

この時代、ヨーロッパは王位継承をめぐる戦争が絶えなかった。傭兵たちはせつせと戦争とペストを運んだ。当時貧富の差は激しく、隔離とはいえ、ボツカチオやデフォアの小説にあるように、金持ちは郊外の屋敷で隔離した環境の中で歓楽の限りを尽くし、貧民は都市の城壁の中で、絶望的な死を待っていたようである。さまざま不潔さ、悪臭と汚水、やがて迫りくる死、地獄図である。ヨーロッパの各都市ではこのような状況が次々と生じたようで、一つの町が丸々死滅して感染が途絶えることもまれではなかった。究極の隔離ではあった。

その後のスペイン風邪の大流行は、あまりにも感染地域が広く、第一次大戦による移動人口も多く、相手がウイルスだったために、過去の経験と知識だけでは無力であった。インフルエンザ・ワクチンなどというものは、だれもまだ知る由もなかった。

さて、日本。極東の島国は、海がかなりの守りをしてくれた。それでも痘瘡や麻疹は猛威を振るった。本来の入浴好き、清潔好きなどが水を経由した感染をある程度防いではくれたものの、鎖国中でも長崎からコレラ、ペストの小感染は起きていた。ただ、その間に蘭学者たちは貪欲に知識を吸収し、飯能における日本最初の帝王切開や、華岡青洲による麻酔下の乳がん切除など、驚くべき業績を上げ、種痘は維新前に広く行われていた。

明治に入って、コレラの大々的な来襲は、開国による人の往来の飛躍的な増加と相まって、想像を絶するものであった。原因菌は当時まだ不明で、抗生剤などの薬剤がない状態では、悪魔的な猛威を振るった。都立駒込病院の記録によれば、明治一九年には二四六〇人のコレラ患者が入院し、一八五九人は死亡している。病院の裏の寺への葬列が途切れなかったという記載がある。患者発生地区の閉鎖や、衣類の焼却、器具の消毒など基本的な処置はしているものの、完璧とはいえなかった。それでも水の管理や患者を一応隔離することにより、何とか流行は終

息した。しかし、公衆衛生学的な完璧な隔離が最も重要である、という結論には至っていない。今回の新型コロナウイルスは、発症前に感染力を持つという点に、今までの感染との大きな差異がある。三密を防ぎ、マスク・うがい・手指消毒など初期の対応については、日本人の村八分を嫌い、流れに乗る性癖も相まって、妥当ではあった。しかし、感染の疑われる人や地域に対し、公権力を以て移動を禁じて、封鎖してしまうという完璧な隔離、つまりヨーロッパのペスト感染における教訓は、一部のヨーロッパと、アジアの中国・韓国・台湾などの国で見られなかった。罹って生き残った集団のワクチン効果はあまりに巧遅（うまいけれど時間がかかる）なので（スウェーデン方式）、全員へのワクチン接種による積極的な方策が有効なのである（イスラエル方式）。日本では初動体制の八方美人的な不徹底が今の状況を招いており、前政権の責任は大である。個人の自由との兼ね合いは難しいが、完璧な隔離と全員ワクチンが新型コロナウイルス克服の鍵と痛感すべきだ。